



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                         |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 学習支援の利用状況とキャリア意識及び養育態度の関係：中学生とその保護者、および大学生サポーターに注目して                                    |
| Author(s)        | 内山, 昂; 唐川, 真歩; 三井, 小波 他                                                                 |
| Citation         | 子ども発達臨床研究, 23, 27-40                                                                    |
| Issue Date       | 2026-06-20                                                                              |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/rcccd.23.27">https://doi.org/10.14943/rcccd.23.27</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/99962">https://hdl.handle.net/2115/99962</a>       |
| Type             | departmental bulletin paper                                                             |
| File Information | 03_1882-1707_04.pdf                                                                     |



## 一般論文

# 学習支援の利用状況とキャリア意識及び養育態度の関係 — 中学生とその保護者、および大学生サポーターに注目して —

内山 昂\*・唐川 真歩\*\*・三井 小波\*・加藤 弘通\*\*\*

## The Relationship Between Learning Support Service Utilization, Career Awareness, and Parenting Attitudes:

A Focus on Junior High School Students, Their Parents, and College Student Supporters

Subaru Uchiyama, Maho Karakawa, Konami Mitsui, Hiromichi Kato

### 要 旨

本研究は、生活困窮世帯を対象とした学習支援事業の多面的機能に着目し、A市の学習支援事業Xにおける中学生336名、保護者217名、大学生サポーター103名を対象とした質問紙調査から、①中学生の居場所感・時間的展望およびキャリア意識、②保護者の不安・子どもの反抗の認知・養育態度、③大学生サポーターのキャリア形成との関連を明らかにすることを目的とした。分析の結果、中学生では、居場所感のほか、現在の充実感が本来感を媒介して周囲のサポート認知に関連していた。保護者では、学習支援の意義認知が肯定的養育態度に、子どもの反抗行動が不安を媒介して否定的養育態度に影響を与えていた。大学生では、活動をスキルアップや交流の場と認知することがキャリア志向に関連していた。以上より、学習支援事業は、居場所形成を通じた利用者支援に加え、支援者のキャリア形成や保護者の養育にも影響する包括的支援としての機能を有することが示唆された。

**キーワード：**学習支援、キャリア意識、中学生、大学生、養育態度

### 1. 問題と目的

我が国では、2015年の「子どもの学習・生活支援事業」制度の開始以降、「生活困窮者自立支援制度による全国的な展開の時代」（船橋、2022a）とも指摘されるように、全国各地において学習支援の取り組みが拡大している。また、近年の学習支援事業においては、「単に勉強を教え

るだけでなく、居場所づくり、日常生活の支援、親への養育支援などを通じて、子どもの将来の自立に向けたきめ細やかで包括的な支援」（厚生労働省、2025）として、教育的側面だけでなく、居場所づくりや日常生活の支援といった福祉的側面も重視されるようになった。

中村（2020）は、相対的貧困世帯の子どもについて、「中学や高校あるいは大学などに進学した

\* 北海道大学大学院教育学院

\*\* 北海道大学教育イノベーション機構

\*\*\* 北海道大学大学院教育学研究院

いが、お金のことで進路を制限されていると感じる」傾向や、「将来の夢や目標」を持ちにくい傾向を示唆しており、相対的貧困世帯の子どもにおいては、進学や学習塾に通うことに制限があり、そのことが「将来の夢や目標」に影響を与えている可能性を指摘している。これに関連して、船橋(2022b)は、子どもや保護者が将来の進学・職業選択に対する見通しを形成することで学習支援の需要が生じるとしている。以上から、生活困窮世帯を対象とした学習支援は、利用者にとって、進学や就職といったキャリア形成における不利益を補填する意味合いを持つことが考えられる。

また、小野(2019)が行ったスクールソーシャルワーカーに対する調査では、子どもが抱える課題の解決に向けた支援の中で、保護者のネガティブな養育態度に加えて、保護者が子どもの発達や不登校に対する不安を受け止めることの難しさなどが、支援の不全感として表出されると指摘している。さらに、この結果について、子どもの課題解決には、子どもへの働きかけだけでなく、保護者へのエンパワーメントが求められると考察されている(小野, 2019)。一方で、丹羽(2023)は、青年期に子どもからの反発を受けるようになると、親は子どもの様子に対して困惑し、傷つき、また自らの子育てに対する後悔の気持ちが生じるようになると述べている。これにより、親としての自分自身に自信が持たなくなることから、親としてのアイデンティティが揺らぐ危機を経験するとしている。平石(2019)も同様に、青年期の親子間の葛藤は、喪失体験や消極的な諦めの体験につながることもあり、子どものありのままを受け止めることは容易ではないと述べている。このように、子どもの支援においては、同時に保護者の子どもに対する受容的な姿勢や、そのような姿勢へのエンパワーメントが重要であると考えられる。一方で、子どもに対する保護者の不安や子どもからの反発は、受容的な姿勢の阻害要因となり得るといえる。

加えて、学習支援の現場においては、従来、支援者は専門性のあるケースワーカーが主であった

が、現在では大学生ボランティアが増加している(松村, 2019)など、支援者の属性にも広がりが見られる。加納(2015)は、生活困窮世帯の中学生の支援者として大学生が関わる中で、大学生にも傾聴の姿勢が芽生えるとしており、支援者側にも生徒への理解を通じた学びがあることを示唆している。また、谷田(2001)は、大学生の対人福祉ボランティアの活動継続の要因として、「価値ある経験の獲得」や「就職との関わり」を挙げている。したがって、学習支援の活動が大学生にとってキャリア形成の意味合いを持つことは、子どもに対する支援の継続とも関連すると考えられる。

以上を踏まえると、学習支援事業は、利用する子どもにとっては、現在の居場所の獲得に加え、キャリア意識や将来展望の形成に関わる支援としても機能し得る。また、子どもに対する支援の効果を考える上で、学習支援事業と保護者の子どもに対する不安や養育態度との関連を検討する必要がある。さらに、支援の持続性の観点から、大学生支援者にとってキャリア形成や対人援助に関する学びの機会を有することは重要であるといえる。したがって、学習支援事業の意義と機能を、これら三者それぞれの視点から総合的に検討する必要がある。

そこで本研究では、A市の学習支援事業Xを利用する中学生とその保護者、および支援者である大学生サポーターを対象に調査を行い、

- ① 中学生の居場所感・時間的展望・キャリア意識
- ② 保護者の子どもに対する不安・子どもの反抗の認知・養育態度
- ③ 大学生支援者のキャリア形成

の以上3点と学習支援事業における支援との関連を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方 法

本研究では、1) 中学生、2) 保護者、3) 大学生サポーターについて、それぞれ質問紙を作成し、Google フォームでの回答を求めた。対象者ごとの質問紙の内容は以下の通りである。

### 1) 中学生

**協力者** 中学生：336名（1年生100名、2年生111名、3年生125名）

**社会的居場所感** 「少人数社会的居場所尺度」（岡崎・中村，2019）より、「受容的居場所」「信頼的居場所」から各3項目を使用。学習支援事業Xに対する認識として、5件法で（1＝全くあてはまらない～5＝とてもあてはまる）で回答を求めた。

**時間的展望** 「時間的展望尺度」（白井，1994）より、「目標志向性」「希望」「現在への充実感」から各3項目を使用し、5件法（1＝あてはまらない～5＝あてはまる）で回答を求めた。

**本来感** 「本来感尺度」（伊藤・小玉，2005）から3項目を使用し、5件法（1＝あてはまらない～5＝あてはまる）で回答を求めた。

**キャリア意識** 「中学生の進路意識・環境適応に関する尺度」（南ほか，2011）より「進路決定」「サポート認知」から各3項目を使用し、5件法で（1＝全くそうではないと思う～5＝とてもその通りだと思う）で回答を求めた。

### 2) 保護者

**協力者** 学習支援事業Xを利用する中学生の保護者：217名

**子どもに対する不安感** 子どもに対して不安に思うことについて、独自に作成した8項目（学習、進路、人間関係、健康、家庭生活、学校生活、心理、発達）を用い、4件法（1＝全く感じない～4＝とても感じる）で回答を求めた。

**養育態度** 「肯定的・否定的養育行動尺度」（伊藤ら，2014）より、「肯定的養育」および「否定的養育」から各4項目を用い、4件法（1＝ない・ほとんどない～4＝非常によくある）で回答を求めた。否定的養育については逆転項目を含む。

**子どもの反抗の認知** 「反抗行動・反抗感情尺度」（須崎，2008）の下位尺度「反抗行動」「反抗感情」から各6項目を用い、それぞれ反抗行動について4件法（1＝ない・ほとんどない～4＝非常によくある）、反抗感情について5件法で（1＝全く

あてはまらない～5＝とてもあてはまる）で回答を求めた（いずれも逆転項目を含む）。

**学習支援事業Xの意義** 支援事業の意義について、「お子さまにとって「学習支援事業X」はどのような場になっていたと感じますか？」という質問に対し、独自に作成した6項目（学習の場、交流の場、学校・家庭以外の居場所、新しい価値観を学ぶ場、進路や将来の夢を考える場、悩みや相談を聞いてもらう場）を用い、5件法（1＝全くあてはまらない～5＝とてもあてはまる）で回答を求めた。

### 3) 大学生サポーター

**協力者** 大学生サポーター：103名（大学1年生～大学院生）

**学習支援事業Xがどのような場か** 学習支援事業Xが大学生サポーターにとってどのような場になっているのか、独自に設定した4項目（スキルアップの場、交流の場、アルバイトのひとつ、自分のキャリア形成の場）について、5件法（1＝思わない～5＝思う）で回答を求めた。

**キャリア意識** 「自己成長志向性尺度」（樽木ほか，2013）より、「自己成長志向」「自己目標志向」のうち各4項目を用い、5件法（1＝全くあてはまらない～5＝とてもあてはまる）で回答を求めた。

## 3. 結果

### 1) 中学生を対象とした居場所感・時間的展望とキャリア意識の関連

本項では、学習支援事業Xが利用者のキャリア意識と関連する可能性に着目し、中学生の進路選択・キャリア意識に影響を与える要因について検討する。

分析に先立ち、「社会的居場所感尺度」「時間的展望尺度」「本来感尺度」「進路意識尺度」の4つの尺度について、確認的因子分析を行った。

まず、「社会的居場所尺度」については、岡崎・中村（2019）が示していた「受容的居場所感」と「信頼的居場所感」の2因子で確認的因子分析を

行った。その結果、モデルの適合度指標は、CFI = .994, TLI = .988, RMSEA = .056 であった。一般に、CFI および TLI が 1 に近づくほど、また RMSEA < .05 であればデータへの適合が良好とされる (小塩, 2010)。本結果では RMSEA = .056 であったため、適合は十分とは言えないと判断し、最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、1 因子構造 ( $\alpha = .916$ ) が得られたことから、因子名を「社会的居場所感」とした。

「時間的展望尺度」についても同様に確認的因子分析 (CFI = .947, TLI = .921, RMSEA = .085) を行ったが、適合が十分ではないと判断されたため、最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を実施した。その結果、1 項目を削除することで先行研究と同様の 3 因子構造が得られた。因子名についても先行研究に準拠し、「目標志向性 ( $\alpha = .75$ )」「希望 ( $\alpha = .83$ )」「現在の充実感 ( $\alpha = .66$ )」とした。

さらに、「本来感尺度」については、先行研究をならい 1 因子構造 ( $\alpha = .82$ ) を想定した。

「進路意識尺度」についても確認的因子分析 (CFI = .915, TLI = .841, RMSEA = .114) を行い、適合が十分でなかったため最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を実施した。その結果、1 項目を削除した上で 2 因子構造が得られ、「進路選択への自信 ( $\alpha = .66$ )」「周囲のサポート認知 ( $\alpha = .73$ )」と命名した。

次に、各尺度の因子間の相関分析を行った (表 1)。すべての因子間に有意な正の相関がみられたものの、特に強い相関が見られたのは、「希望」と「進路決断への自信」、「現在の充実感」と「本来感」であった。「希望」は自身の未来に対するポジティブな認識を意味し、「希望」が高い人は進路決断に対しても前向きに捉えられる可能性が示唆される。また、「現在の充実感」は現状に満足し、ありのままの自分を受け止めるという点で、「本来感」と強い相関を示したといえる。一方で、

表 1 社会的居場所感および時間的展望、キャリア意識尺度の相関

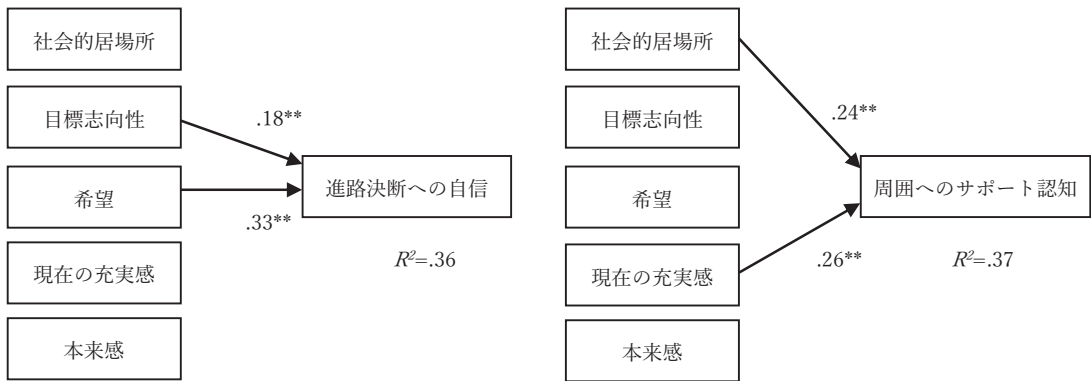
|              | <i>M</i> | <i>SD</i> | 1      | 2      | 3      | 4      | 5      | 6      |
|--------------|----------|-----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1. 社会的居場所感   | 4.091    | 0.681     |        |        |        |        |        |        |
| 2. 目標志向性     | 3.391    | 1.047     | .187** |        |        |        |        |        |
| 3. 希望        | 3.394    | 1.021     | .211** | .427** |        |        |        |        |
| 4. 現在の充実感    | 3.732    | 0.800     | .274** | .186** | .354** |        |        |        |
| 5. 本来感       | 3.601    | 0.942     | .288** | .167** | .461** | .524** |        |        |
| 6. 進路決断への自信  | 2.784    | 0.715     | .205** | .365** | .513** | .266** | .308** |        |
| 7. 周囲のサポート認知 | 3.208    | 0.540     | .309** | .153** | .347** | .448** | .381** | .425** |

\*\* $p < .01$

現状に満足せず向上を志向する「目標志向性」との相関は相対的に小さいことにも注目すべきである。

さらに、学習支援事業 X に対する社会的居場所感および中学生の時間的展望とキャリア意識の関連を検討するために、社会的居場所感および時間的展望、本来感を独立変数、進路決断への自信と周囲のサポート認知を従属変数として重回帰分析を行った (図 1)。その結果、「進路決断への自信」

には「目標志向性」( $\beta = .18, p < .01$ )と「希望」( $\beta = .33, p < .01$ )が、「周囲のサポート認知」には「社会的居場所感」( $\beta = .24, p < .01$ )と「現在の充実感」( $\beta = .26, p < .01$ )が有意な影響を与えていた。すなわち、現状に満足せずに向心を持ち、将来に対してポジティブな見方を持つことは、自力で進路を決断できるという自信を高める可能性がある。一方で、居場所意識が高く、現状に満足する感覚を持つことは、周囲から支えら



\*\* $p < .01$

図1 社会的居場所感および中学生の時間的展望とキャリア意識の重回帰分析

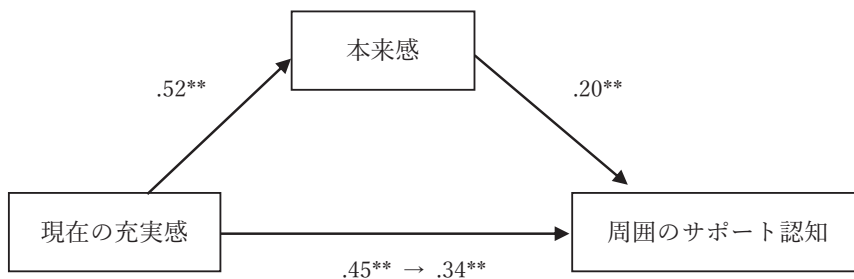
注：図中の矢印は正の関連を示している。

有意がみられたすべての変数で VIF < 3

れているという認知を高め、さらに進路選択を含め困ったときには他者へ相談できるという感覚を促進することが示唆された。

また、表1の結果から、「現在の充実感」と「本来感」に強い正の相関が見られたことを踏まえ、「現在の充実感」が「本来感」を媒介して「周囲のサポート認知」に影響を及ぼす可能性について検討するため、媒介分析を行った(図2)。その結果、「現在の充実感」と「周囲のサポート認知」の関連は、部分的に「本来感」によって媒介され

ることが明らかになった。つまり、「現在の充実感」は、直接「周囲のサポート認知」に関連する一方で、「現在の充実感」が「本来感」を高め、その結果「周囲のサポート認知」を高めるという関連性も明らかになった。すなわち、現状に満足できることは、ただちに周囲に支えられているという認知につながるだけでなく、自己の「本当らしさ」の感覚を高め、それが周囲に支えられているという認知につながる経路もあると考えられる。



\*\* $p < .01$

図2 「本来感」を媒介変数とした「現在の充実感」と「周囲へのサポート認知」の媒介分析



## 2) 保護者の養育態度と学習支援の意義・子どもの反抗・子どもに対して感じる不安の関連

本項では、学習支援事業 X の保護者の視点における意義に着目し、保護者の子どもに対する不安・子どもの反抗の認知および養育態度との関連を検討する。

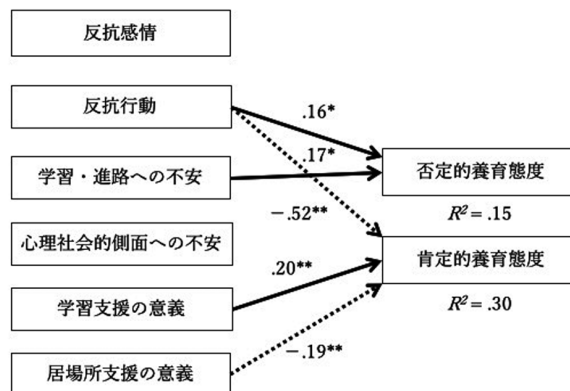
分析に先立ち、「反抗感情・行動尺度」「肯定的・否定的養育行動尺度」の 2 つの尺度について、確認的因子分析を行った。

まず、「反抗感情・行動尺度」については、野村 (2014) が示した「反抗感情」と「反抗行動」の 2 因子で確認的因子分析を行った。その結果、独自性の高い項目を「反抗感情」について 2 項目、「反抗行動」について 1 項目それぞれ削除した上で、モデルの適合度として CFI = .921, TLI = .891, RMSEA = .086 を示す 2 因子構造が得られた。一般に、RMSEA が .10 を超えず、また CFI および TLI が 1 に近づくほどデータへの適合が良好とされる (小塩, 2010) ことから、モデル適合度は概ね許容可能な水準にあると判断した。また、両因子間には中程度の相関が認められ ( $r = .56$ ,  $p < .001$ )、両者は関連しつつも区別可能な構成概念であることが示唆された。因子名は先行研究に準拠し、「反抗感情 ( $\alpha = .79$ )」「反抗行動 ( $\alpha = .67$ )」とした。

また、「肯定的・否定的養育行動尺度」については、伊藤ら (2014) が示したように「肯定的養育」と「否定的養育」の 2 因子で確認的因子分析 (CFI = .858, TLI = .790, RMSEA = .120) を行い、適合が十分でなかったため、探索的因子分析を行ったが、十分な適合を示す因子構造は得られなかった。そのため、本研究では特に因子負荷量が低かった「否定的養育」における 2 項目を削除した上で、それぞれの項目を先行研究に準拠した分類に基づいて合成し、合成変数「肯定的養育態度 ( $\alpha = .76$ )」「否定的養育態度 ( $\alpha = .68$ )」として扱うこととした。

さらに、「子供に対する不安」と「学習支援事業 X の意義」についての 2 つの設問の項目について、最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。

その結果、「保護者が子どもに対して感じる不安」 (CFI = .976, RMSEA = .084) については「学習・進路への不安 ( $\alpha = .87$ )」と「心理社会的側面への不安 ( $\alpha = .87$ )」の、概ね許容可能な適合度を示す 2 因子構造が得られた。また、「学習支援事業 X の意義」 (CFI = .990, RMSEA = .066) については「学習支援 ( $\alpha = .71$ )」と「居場所支援 ( $\alpha = .73$ )」の、概ね良好な適合度を示す 2 因子構造が得られた。



\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

図3 子どもの反抗・子どもに対して感じる不安・学習支援事業 X の意義と保護者の養育態度の関連  
注：図中の値は標準回帰係数。実線の矢印は正の関連を、点線の矢印は負の関連を示している。

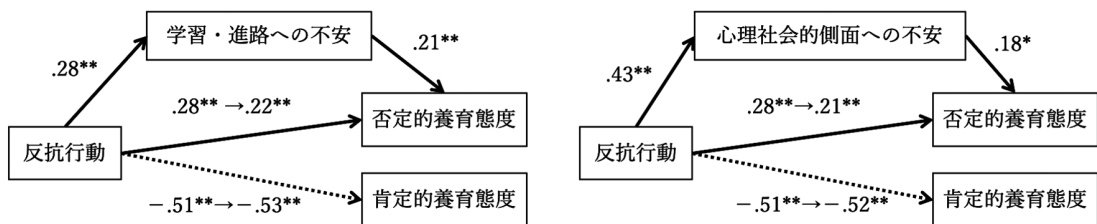
有意がみられたすべての変数で VIF < 3

次に、子どもの反抗、子どもへの不安、学習支援事業Xに感じる意義と、保護者の養育態度との関連を検討するために、反抗行動・反抗感情、子どもに対して感じる不安、および学習支援事業Xの意義を独立変数、肯定的・否定的養育態度を従属変数とする重回帰分析を行った（図3）。

その結果、「否定的養育態度」には、「反抗行動」（ $\beta = .16, p < .05$ ）および「学習・進路への不安」（ $\beta = .17, p < .05$ ）が有意な正の関連を示した。また、「肯定的養育態度」には、「学習支援の意義」（ $\beta = .20, p < .01$ ）が有意な正の関連を示し、「反

抗行動」（ $\beta = -.52, p < .01$ ）および「居場所支援の意義」（ $\beta = -.19, p < .01$ ）は有意な負の関連を示した。

さらに、図3で示した通り、子どもの反抗行動と保護者の養育態度について比較的強い関連がみられたことから、「反抗行動」が、保護者が子どもに対して感じる「学習・進路への不安」および「心理社会的側面への不安」を媒介して養育態度に影響を与える可能性を検討するために、媒介分析を行った（図4）。



$^{**}p < .01, ^{*}p < .05$

図4 子どもに対して感じる不安を媒介変数とした子どもの反抗行動と養育態度の媒介分析

注：図中の値は標準回帰係数

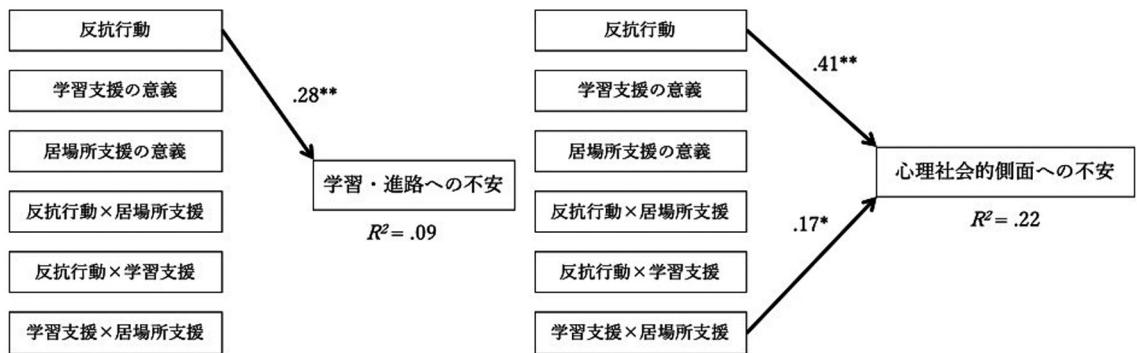
図中の実線の矢印は正の関連を、点線の矢印は負の関連を示している。

その結果、「反抗行動」と「否定的養育態度」の関連は、「学習・進路への不安」および「心理社会的側面への不安」によって部分的に媒介されることが明らかになった。この結果から、子どもの反抗行動は保護者の否定的養育態度に直接関連する一方で、子どもの反抗的行動に対する不安を介して、子どもに対する否定的養育態度と関連することも明らかになった。一方で、「反抗行動」と「肯定的養育態度」には、子どもに対して感じる不安による有意な媒介効果はみられず、子ども

の「反抗行動」は保護者の「肯定的養育態度」に直接的な負の影響を与えることが明らかになった。

また、図4で示した結果を踏まえ、子どもの反抗行動と保護者が子どもに対して感じる不安について、学習支援事業Xにおける支援の調整効果を検討するため、「反抗行動」「学習支援の意義」「居場所支援の意義」とそれらの交互作用項を独立変数、「学習・進路への不安」「心理社会的側面への不安」を従属変数とする重回帰分析を行った（図5）。





\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

図5 子どもの反抗行動・学習支援の意義と子どもに対して感じる不安の関連

注：図中の値は標準回帰係数。矢印は正の関連を示している。

有意がみられたすべての変数で VIF < 3

その結果、「学習・進路への不安」には有意な交互作用はみられなかった。一方で、「心理社会的側面への不安」には「学習支援×居場所支援」において有意な交互作用がみられた。交互作用項の効果について詳細に検討するため、「学習支援の意義」の得点の高低 ( $\pm 1$  SD) ごとに単純傾斜分析を行った (図6)。

その結果、「学習支援の意義」得点が低い場合 ( $b = 0.15$ ,  $t(212) = 2.58$ , 95% CI [0.04, 0.26],  $\beta = .17$ ,  $p < .05$ ) では、「居場所支援の意義」得点が高いほど「心理社会的側面への不安」が低下する傾向がみられた。すなわち、学習支援としての機能に対して意義を比較的感じられていない保護者でも、居場所支援の側面に意義を感じられていれば、子どもの人間関係や学校生活などに関する不安が軽減する傾向があるといえる。一方で、「学習支援の意義」得点が高い場合 ( $b = 0.15$ ,  $t(212) = 2.58$ , 95% CI [0.04, 0.68],  $\beta = .22$ ,  $p < .05$ ) には、「居場所支援の意義」得点が高くなるほど「心理社会的側面への不安」が高まる傾向がみられた。このことは逆に、子どもの心理社会的側面に不安を感じている保護者ほど、学習支援事業 X における学習支援と居場所支援両方に意義を見いだす傾向がある可能性を示唆しているのかもしれない。

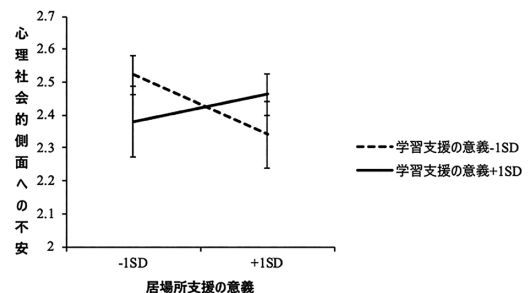


図6 「学習支援の意義」得点ごとの「居場所支援の意義」と子どもに対する「心理社会的側面への不安」の関連

注：エラーバーは標準誤差。

### 3) 学習支援事業 X における大学生サポーターの活動と、キャリア形成との関連

本項では、学習支援事業 X における大学生サポーターの活動と、キャリア形成との関連について検討する。図7は学習支援事業 X で活動する大学生にとって、学習支援事業 X がどのような場だと感じているか、「スキルアップの場」「交流の場」「アルバイトのひとつ」「自分のキャリア形成の場」それぞれについて「思わない」から「思う」の5件法で尋ねた結果である。

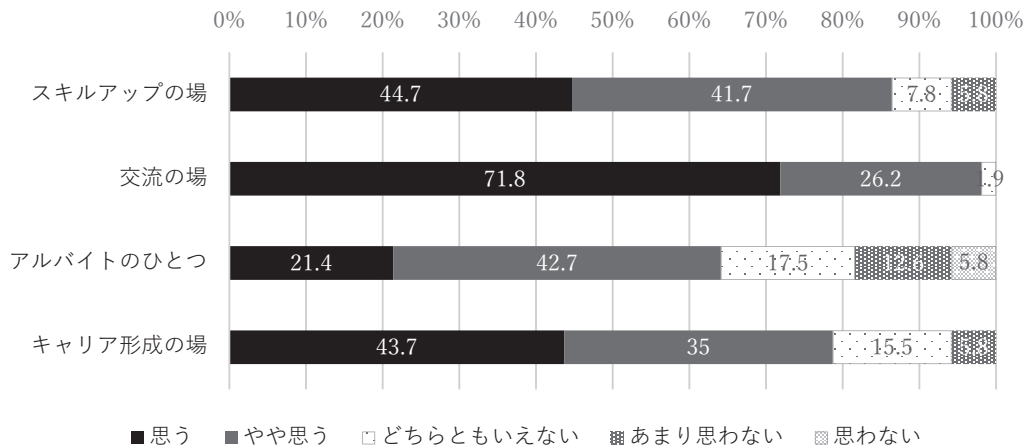


図7 自分にとって学習支援事業Xはどのような場であるか

図7から、学習支援事業Xを交流の場であると感じている者が最も多く、「思う」「やや思う」を併せて98%であった。「スキルアップの場」であると感じている者は86.4%、「自分のキャリア形成の場」であると感じている者は78.7%であり、多くの大学生にとって学習支援事業Xは肯定的な意味を持つ場であるといえる。その一方で、「アルバイトのひとつ」に関しては、「思う」「やや思う」を併せて64.1%とやや低かった。

そこで学習支援事業Xでの活動がキャリア意

識とどのような関連があるのか検討した。表2は、「自分にとって学習支援事業Xがどのような場か」と、キャリア意識の「自己成長志向」「自己目標志向」との相関分析の結果である。「自己成長志向」とは、「活動で協力する大切さ、やり遂げる喜び、自己への自信、自己成長している感覚」であり、「自己目標志向」は、「活動が自分の目標や理想の実現につながり、社会的に見ても意味があるとする感覚」である（樽木ほか、2013）。

表2 学習支援事業Xがどのような場であるかと自己成長志向・自己目標志向との相関

|             | <i>M</i> | <i>SD</i> | 1       | 2       | 3     | 4       | 5       |
|-------------|----------|-----------|---------|---------|-------|---------|---------|
| 1 スキルアップの場  | 4.252    | 0.837     |         |         |       |         |         |
| 2 交流の場      | 4.699    | 0.502     | .486*** |         |       |         |         |
| 3 アルバイトのひとつ | 3.612    | 1.131     | -.113   | -.070   |       |         |         |
| 4 キャリア形成の場  | 4.165    | 0.898     | .440*** | .503*** | -.168 |         |         |
| 5 自己成長志向    | 4.508    | 0.522     | .460*** | .403*** | -.155 | .371*** |         |
| 6 自己目標志向    | 4.393    | 0.567     | .517*** | .446*** | -.134 | .473*** | .680*** |

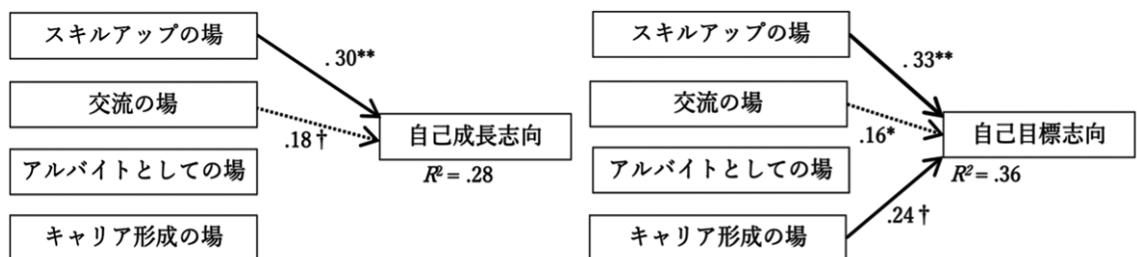
\*\*\* $p < .001$

学習支援事業Xがどのような場であるかと、自己成長志向・自己目標志向との相関分析の結果から、自己成長志向、自己目標志向に最も強い相関を示したのは「スキルアップの場」であったが、「交流の場」も「自己成長志向」「自己目標志向」に正の相関を示した。学習支援事業Xにおいて中学生や大学生、職員と関わる場であるという感覚が、目標の実現や成長につながるという感覚に関連しており、大学生のキャリア形成の点からも、学習支援事業Xにおける他者との交流が重要であることが示唆できる。その一方で、「アルバイトのひとつ」と「自己成長志向」「自己目標志向」は、有意ではないものの、負の相関を示した。図7で示したように、学習支援事業Xをアルバイトのひとつと感じる者が他の項目に比べ少なかったことから、学習支援の活動が一時的な収入源ではなく、未来を見据えたキャリア形成の場になりうるかは、学習支援の場の主観的な意味づけに関

わっている可能性がある。

続いてスキルアップの場・交流の場・アルバイトとしての場・キャリア形成の場を独立変数、自己成長志向および自己目標志向を従属変数とした重回帰分析を行った（図8）。その結果、自己成長志向にはスキルアップの場（ $\beta = .30, p < .01$ ）と交流の場（ $\beta = .18, p < .10$ ）が、自己目標志向にはスキルアップの場（ $\beta = .33, p < .01$ ）、交流の場（ $\beta = .16, p < .05$ ）、キャリア形成の場（ $\beta = .24, p < .10$ ）が有意な影響を与えていた。

すなわち、学習支援事業Xで自分自身のスキルが向上し、他者と交流する場だと認知することが、自己成長につながる。また、スキルアップ、交流に加え、キャリア形成の場であると感じることが、学習支援での活動が目標や理想の実現につながり、社会的にみても意味があるという感覚につながると考えられる。



†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

図8 学習支援事業Xがどのような場であるかとキャリア意識の重回帰分析

注：図中の値は標準回帰係数。実線の矢印は有意な関連を示している。

有意がみられたすべての変数で VIF < 3

#### 4. 考 察

##### 1) 中学生を対象とした居場所感・時間的展望とキャリア意識

中学生を対象とした学習支援事業Xにおける居場所感・時間的展望とキャリア意識との関連について検討した結果、居場所感は、被受容感や本来感と関連が深い（西中，2014；石本，2010）こ

とからも、未来志向よりも現在の自己受容を促進する機能を持つことが示唆された。それにより、現在の対人関係を重視する傾向が強まり、キャリア意識についても自力で進路選択をするよりも、周囲と相談しながら進路選択をする傾向が高まる可能性がある。

図1の結果からは、キャリア意識や進路選択に対する態度は、将来の目標の有無そのものよりも、

将来に対してポジティブな認識を持つか、現在に対してポジティブな認識を持つかといった認識のあり方に起因して異なるといえる。また、これらの結果は、南ら（2011）が示した、「未来に対する希望が周囲からのサポートを受け入れ、進路選択の決定につながる」という見解とは部分的に異なる。本研究では、将来への志向性が高い人と現在の充実感が高い人では、進路選択に対するアプローチが異なる可能性が示唆された。したがって、キャリア教育においては、将来に対するポジティブな展望を育成するだけではなく、現在に価値を見出している生徒に対しては、周囲との良好な関係性の構築を促すことによって目の前にある進路選択を乗り越えるよう支援すると効果的かもしれない。

## 2) 保護者の養育態度と学習支援事業Xの意義・子どもの反抗・子どもに対して感じる不安

子どもの反抗と養育態度の関連について、図3の重回帰分析の結果から、子どもが保護者に対して反抗的な行動や態度を取っていると保護者が認識していることと、保護者が子どもに対して否定的な態度で接すること、および肯定的な態度で接することが難しくなることには関連があることが明らかになった。また、図4の媒介分析から、保護者は子どもの反抗的行動に不安を感じ、その不安を介して子どもに対する否定的養育態度と関連することも明らかになった。以上の結果からは、高秀ら（2022）が示したように保護者の養育行動が子どもの反抗に関連するだけでなく、子どもの反抗的行動によって保護者が子どもにポジティブな態度で接することができなくなるという、親子関係における悪循環が生じる可能性が考えられ、今後さらに詳細な検討が必要である。図5において、子どもの反抗行動と保護者の不安との関連に対して、学習支援事業Xの意義による調整効果がみられなかったことから、学習支援の意義は、家庭における親子関係に起因する保護者の心理的負荷には影響を及ぼしにくいと思われる。

また、保護者は、子どもが利用する学習支援の

意義を感じることで、子どもに対してより肯定的な態度で接することができる可能性が示唆された。一方で、居場所支援の意義を感じることで、肯定的な養育態度には負の関連があることが明らかになった。つまり、家庭で子どもに対してポジティブな接し方をする機会が比較的少ない保護者のほうが、学習支援事業Xの居場所支援の意義をより感じる傾向にあるということである。この傾向は、親子関係に課題を抱えた保護者に対する学習支援事業Xにおける居場所支援の必要性の高さを示している可能性が考えられるが、この点については今後、より詳細な検討が必要である。加えて、図3において、否定的養育態度 ( $R^2 = .15$ ) よりも肯定的養育態度 ( $R^2 = .30$ ) のほうが説明率が高いことから、保護者が学習支援の意義を感じることは、否定的養育態度よりも肯定的養育態度により大きく関連するといえる。また、図5では「学習支援の意義」と「居場所支援の意義」の交互作用項のみにおいて、子どもの生活面に対して保護者が抱える不安と有意な関連がみられた。この結果から、子どもの人間関係や学校生活に不安を抱えている保護者ほど、学習支援事業Xがもつ学習支援と居場所支援両方の意義をより感じる傾向にあるといえる。

学習支援事業において、成澤（2018）は支援者側の視点から、「学習と居場所のジレンマ」という問題を指摘しており、学習支援と居場所支援のそれぞれに意義があるものの、支援の場においてどちらの要素を重視するかによってニーズにそぐわない利用者層の排除が生じうるとしている。一方で、本研究の結果からは、学習支援と居場所支援は、単独での意義だけでなく、学習支援と居場所支援の両側面を兼ね備えていることの重要性が示唆された。以上から、学習支援事業において、教育的側面と福祉的側面の双方を有していることは、子どもに直接的に影響するだけでなく、保護者を通じて間接的な影響を及ぼす可能性があり、今後さらなる検討が必要と思われる。

### 3) 学習支援事業 X における大学生サポーターの活動と、キャリア形成との関連

大学生にとって学習支援事業 X がどのような場であるかとキャリア形成との関連について考察する。特に調査の結果から、交流の場が自己成長志向、自己目標志向の両者に有意に関連したことについて詳述する。学習支援において、年齢や価値観の異なる他者を受容し、継続的に関わることは、大学生にとって、学習支援が交流の場であるという認知をもたらしたと考えられる。加えて、そのような対人関係の実践は社会的スキルの向上に少なからず関与している可能性がある。社会的スキルの獲得は、進路選択の過程に対する自信や確信である自己効力感の向上につながる（近末・近藤, 2012）ことと同様に、交流の場という認知のもと社会的スキルを獲得したことで、将来への自信や目標の実現である自己成長志向や自己目標志向が向上したと推察される。

また本調査では、スキルアップ、交流、キャリア形成の場であるという認知が、自己成長志向や自己目標志向に有意な相関を示した。つまり、学習支援の活動と将来への自己形成との関連には、大学生自身の場の認知や意味づけが重要であると考えられる。このことは、活動が自己形成に与える影響は、どのような文脈のもと活動を行うかによって異なるという山田（2004）の見解を支持するものである。したがって、大学生支援者のキャリア形成において、学習支援の場が他者との交流の場となり、良好な対人関係の構築ができるよう、活動に携わる職員やスタッフがサポートすることが有効であると示唆できる。以上から、中学生を対象とした学習支援における勉強のサポートや居場所づくりは、その実践の過程で、支援者である大学生サポーターのキャリア形成にもポジティブな影響をもたらすといえる。

学習支援事業は、一般的には、大学生が中学生を支援する場と捉えられがちである。しかし本研究の結果から、大学生サポーターは、中学生を支援することで、自らのキャリア形成が促進されている可能性が示唆された。このことは逆に考えれ

ば、大学生は中学生によってキャリア形成を支援されているともいえる。したがって、学習支援という場合は、中学生が一方的に支援される場ではなく、同時に彼女・彼らが支援する立場にある大学生を実は支援している場でもあるのかもしれない。支援者・被支援者の関係性を固定化し、中学生を一方的に受動的な存在とみなすのではなく、支援の場の支援者・被支援者の相互性についても、今後、学習支援の場をさらに検討し深めていく必要がある。

### 引用文献

- 近末 優子・近藤 卓（2012）. 大学生における社会的スキルと進路選択に対する自己効力感の関連. 学校メンタルヘルス, 15（2）, 225-232.
- 船橋 理仁（2022a）. 学習支援の目的としての「居場所」—生活困窮世帯等の中学生を対象とした学習支援に関する研究レビュー—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）, 65, 47-56.
- 船橋 理仁（2022b）. 愛知県における学習支援事業の地域の特徴と課題—委託団体の種別と支援の担い手に注目して—. 地理学報告, 124, 123-132.
- 平石 賢二（2019）. 親と子どもにとっての自立. 教育と医学, 789, 4-11.
- 石本 雄真（2010）. こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感, 自己有用感との関連から—. カウンセリング研究, 43（1）, 72-78.
- 伊藤 大幸・中島 俊思・望月 直人・高柳 伸哉・田中 善大・松本 かおり・大嶽 さと子・原田 新・野田 航・辻井 正次（2014）. 肯定的・否定的養育行動尺度の開発—因子構造および構成概念妥当性の検証—. 発達心理学研究, 25（3）, 221-231.
- 伊藤 正哉・小玉 正博（2005）. 自分らしくある感覚（本来感）とストレス反応, およびその対処行動との関係. 健康心理学研究, 18（1）, 24-34.
- 嘉納 英明（2015）. 生活困窮世帯の中学生への学習支援事業と学生ボランティアの学び. 生活体験学習研究, 15, 67-73.
- 厚生労働省（2025）. 子どもの学習・生活支援事業に関するガイドライン. <https://www.mhlw.go.jp/content/001506554.pdf>
- 松村 智史（2019）. 生活困窮世帯の子どもの学習・生活支



- 援事業の成立に関する一考察—国の審議会等の議論に着目して—. 社会福祉学, 60 (2), 1-13.
- 南 雅則・浅川 潔司・岸野 葵 (2011). 時間的展望と中学生の進路意識および学校適応感に関する研究. 学校教育研究, 23, 9-15.
- 中村 剛 (2020). 赤穂市における子どもの生活実態調査—剥奪指標の観点から—. 関西福祉大学研究紀要, 23, 31-38.
- 成澤 雅寛 (2018). 居場所と学習のディレンマ—非営利学習支援団体から見える子どもの貧困対策の限界—. 教育社会学研究, 103, 5-24.
- 西中 華子 (2014). 心理学的観点および学校教育の観点から検討した小学生の居場所感—小学生の居場所感の構造と学年差および性差の検討—. 発達心理学研究, 25 (4), 466-476.
- 丹羽 智美 (2023). 親子間の葛藤がおこる意味—第2反抗期の理解のために—. 四天王寺大学紀要, 72, 33-41.
- 野村 有輝 (2014). 親子の情緒的関係性と実際の交流からみた反抗期についての一考察. 神戸大学発達・臨床心理学研究, 13, 32-37.
- 岡崎 直哉・中村 俊哉 (2019). 居場所喪失の経験と目撃が居場所形成に及ぼす影響—居場所とは何か、居場所尺度作成の試み—. 福岡大学紀要, 68 (4), 33-41.
- 小野 芳秀 (2019). 課題を抱える児童生徒とその家族への支援体制に関する研究—A 町教育委員会におけるスクールソーシャルワーク実践の観点から—. 東北福祉大学研究紀要, 43, 51-70.
- 小塩 真司 (2010). はじめての共分散構造分析—Amos によるパス解析—. 東京図書.
- 白井 利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究. 心理学研究, 65 (1), 54-60.
- 須崎 暁世 (2009). 現代の青年における第二反抗期—反抗が第二の分離固体化に及ぼした影響を中心に—. 神戸大学発達科学部人間形成学科 2008 年度卒業論文 (未公刊).
- 高秀 涼佳・渡邊 晶・橋詰 倫典・古田 貴久 (2022). 親の養育態度と第二反抗期, 自我同一性との関係について. 群馬大学共同教育学部紀要 (芸術・技術・体育・生活科学編), 57, 73-78.
- 樽木 靖夫・川田 裕樹・榊原 健太郎・福田 八重・大日向 浩・馬場 千秋 (2013). 大学生の自己形成モデルの検討. 帝京科学大学紀要, 9, 15-23.
- 谷田 勇人 (2001). 福祉ボランティア活動をする大学生の動機分析. 社会福祉学, 41 (2), 83-93.
- 山田剛史 (2004). 現代大学生における自己形成とアイデンティティ—日常的活動とその文脈の観点から—教育心理学研究, 52 (4), 402-413.

## 脚 注

- <sup>1</sup> 本論文においては、唐川が中学生に関する部分（結果の1）と考察の1を執筆、内山が保護者に関する部分（結果の2）と考察の2を執筆、そして三井が大学生サポーターに関する部分（結果の3）と考察の3を担当した。問題と目的、方法については、全員で協議の上、内山が執筆した。



## Abstract

This study explores the diverse functions of learning support programs for children in low-income households. Utilizing questionnaire data from 336 junior high school students, 217 parents, and 103 college student supporters involved in a program in Japan (called “Program X”), this research aimed to clarify the relationships among utilization of the program and: (1) students’ sense of belonging, time perspective, and career awareness; (2) parents’ anxiety, perceptions of children’s rebellion, and parenting attitudes; and (3) the career development of college student supporters. The analysis revealed that for junior high school students, both a sense of belonging for the program and a sense of present fulfillment mediated by a sense of authenticity were linked to perceived support from others. For parents, recognizing the significance of the program was associated with positive parenting attitudes, while children’s rebellious behaviors contributed to negative parenting attitudes mediated by parental anxiety. For college student supporters, viewing the program as an opportunity for skill development and social interaction was associated with stronger career orientation. These results suggest that learning support programs provide comprehensive benefits not only for participants: they foster a sense of belonging among participants, shape the career development of supporters, and positively influence parenting practices.

**Keywords :** Learning Support, Career Awareness, College Student, Junior High School Student, Parenting Attitude